

# 刀匠信国系図の総合的研究：筑紫信国を主として

A Comprehensive Research on Genealogy of the Nobukuni Group Swordsmith:  
Focusing on the “Tsukushi Nobukuni”

福田 博同

FUKUDA Hiroatsu

## 抄録

建武頃(1334-35)山城で活躍した〔初代信国〕から応永頃活躍した三代信国までの刀匠〔山城信国〕については、『跡見学園女子大学文学部紀要』No.52, 2017, p.79-107<sup>1)</sup>(以下、「前号」という)で推敲した。本稿では、永享十二年(1440)豊前宇佐へ移住した四代信国から八代信国までの〔宇佐信国〕や、慶長七年(1602)筑前へ移住した九代信国から明治までの〔筑前信国〕(総称し〔筑紫信国〕という)を中心に、より史実に近い系譜を推敲する。

## Abstract

I published a paper titled "Comprehensive research on genealogy of the Nobukuni group swordsmith : in Yamashiro ." in March 2016 at "Atomi University Faculty of Literature Bulletin" no.53. In this paper, first, I will study "Usa Nobukuni group" moved to Kyushu during the Muromachi period. They emigrated to Fukuoka in the early Edo period and lasted until the early Meiji era. It is said that "Chikuzen Nobukuni Group". I will study mainly Chikuzen's Nobukuni school.

キーワード：刀匠,信国派,宇佐信国,筑前信国,系図

**Keywords:** swordsmith, Nobukuni, Usa-Nobukuni, Chikuzen-Nobukuni School.

## 1 はじめに

南北朝時代から昭和初期まで続いた刀匠〔信国派〕は〔山城信国〕、〔筑紫信国〕、〔南部信国〕、〔越後山村派〕、諸国に大別される。「前号」に続き、本稿では筑紫信国を中心に、諸説を提示し総合的に分析する。【国立国会図書館デジタルコレクション】(略称「国会デジコレ」<sup>2)</sup>)、【国指定文化財等データベース】<sup>3)</sup>等デジタルデータの公開が増えた故、芸術情報学の立場から、より史実に近い系譜を推敲する。ネット上でのデータ公開により、敬称は省略しない。「国会デジコレ」には書影公開分、「送信参加館」、「国会図書館内限定」があるが、近隣の図書館が申請し認められた場合「送信参加館」で利用可能(「国会デジコレ参加館」と略称)。なお、書影を公開している場合、注記に「書影◎」、「国会デジコレ参加館」は「書影□」と記載した。また、写本等にある注記(例：ママ等)は( )、今回筆者が加えた注記は[ ]とした。リンクは 2018 年 2 月 11 日にすべて確認したので、個々には閲覧日を記

載しない。さらに、リンクがNot Foundの場合、Webアーカイブである【Internet Archive】の【Wayback Machine】<sup>4)</sup>で救われる場合があるので利用されたい。また、デジタル処理を簡略化するため以下のようにタグに意味を持たせた。《作品》、〔人名団体〕、【事項】、『典拠資料』、{場所}、〈時〉。注は【ハーバード方式】に名前を加え<sup>5)</sup>、脚注にヘボン式読みを加えた。資料の明治以降は個人情報を考慮し、日を省略した。

## 2 史料(資料)

「前号」で〔山城信国〕中心の史料を掲載したが、〔筑紫信国〕他は省略したものもあり、それらを含めてここに記す。既出史料は必要事項のみを現代語訳し、「前号」史料番号を付した。解説や詳細は「前号」を参照されたい<sup>注1全文</sup>。

### 2.1 信国家の系図、由緒書、藩の記録

史料1)「信国初系図代々祖師付之事」(略称「吉貞記」『福岡藩仰古秘笈 卷二十五』所収<sup>6書誌</sup>)

筑前信国の祖、〔信国吉貞〕の藩へ届け出た由緒書き。黒田長政に仕え、豊前から筑前へ移住した経緯は「前号」史料1<sup>注1全文</sup>を参照されたい。ここでは系図のみ現代語訳した。

〔初代信国〕元応[1319]以降、京〔了戒〕弟子——〔二代信国〕〔虎熊入道〕——〔三代信国〕〔源左エ門〕中頃〔定国〕——

嫡男短命

〔信国吉家〕〔徳千代〕宇佐移住〔安智夢吉門〕に属す。後在京〔源氏〕——〔信国吉包〕〔勝是〕二代目、永享頃[1429-41]——

〔信国吉政〕寛正頃[1460-66]——〔信国吉勝〕文龜頃[1501-03]——〔信国吉成〕十文字鐘打、享禄頃[1528-31]——

〔信国恆吉〕後〔吉次〕弘治頃[1555-58]——〔信国吉盛〕天正頃[1573-92]——〔信国吉秀〕慶長ノ比[1596-1615]——

〔信国吉貞〕九代目 慶長二年[1597]類火、重代の脇指を持ち避難。証文を焼失した故、有増を書く。

慶長六年(ママ)三月二十八日

〔信国助左エ門吉貞〕

史料2)「柳原信国系図」(略称「柳原系図」)<sup>7)</sup>(「前号」史料2<sup>注1全文</sup>)

〔信国吉盛〕(-1624)が筑前移住で記録した系図と累代系図を明治廿一年、〔信国郷太郎〕氏が浄書した系図(前号を訂正)。

〔国吉〕——〔国行〕——〔国俊〕——〔來国俊〕——〔了戒〕——〔国久〕——〔信国〕〔長谷部式部丞〕京五條坊門に住み、延文頃鎌倉の〔貞宗〕門。伝授。応安二年[1369]五月十四日死。追号〔實山一峯〕——信国〔虎熊入道〕貞治頃[1362-67]——信国〔源左衛門〕初め〔定国〕後に信国と打つ。右信国三代京都二住——〔信国吉家〕〔徳千代〕。永享十二年[1440]〔安智夢吉門〕に招かれ豊前国安智夢庄に居住。〔源信国吉家〕と彫り、代々〔信国〕を氏とした〔宇佐信国〕の元祖。文安三年[1446]九月二十三日死追号〔義山勇雪〕——〔信国又八郎〕京都で死追号〔峯山〕——〔信国吉正〕〔九郎左衛門〕寛正五[1464]年九月一日死追号〔白雪良山〕——〔信国吉種〕助右衛門長祿三年[1459]四月十三日死追号〔鐵無心〕——〔信国吉包〕〔亦左衛門〕追号〔一山〕文龜之頃[1501-03]——〔信国吉勝〕助左衛門追号〔雪山〕永正之頃[1504-20]——〔信国吉成〕〔治郎左衛門〕追号〔雪山〕天文之頃[1532-54]——〔信国恆吉〕〔平左衛門〕追号〔宗微〕永祿之頃[1558-69]——〔信国吉秀〕〔亦左衛門〕慶長之頃[1596-1614]——〔信国吉盛〕六郎左衛門追号〔釋淨了居士〕慶長十三年[1608]八月七日死。兄〔吉秀〕は宇佐で郷士格。第六郎左衛門〔吉盛〕流浪し、筑前國早良郡福岡町柳原に居住。子の〔信国惣五郎〕後〔五左エ門〕、親の〔吉盛〕を引連れ、最終的に上座郡入地邑に居住。居住地〔柳原〕を姓名として寛永

刀匠信国系図の総合的研究

元戊辰[1628]年七月十日死。入地邑鍛冶信國の元祖——〔**信國六郎左エ門妻**〕美濃の鍛冶〔**六郎左エ門兼久**〕の娘(筑前〔**信國平四郎**〕の弟子)、柳原信國之元祖——〔**信国吉助**〕慶長十七年、〔大音六左衛門〕宛に「粕谷郡役触頭」につき他の役免除願いを出す。但し此御書付信國四郎八所持也(以上、「前号」の概略)——

〔**信國六郎左衛門吉光**〕寛文十三年[1640]正月十日死ス 追号〔**釈祐頓不退位**〕——

〔**信國五左衛門吉近**〕宝永三丙戌年[1704]三月廿一日ニ死ス八十二才 追号〔**釈休西盡位**〕——

〔**信國勘四郎**〕鍛冶断絶 享保十三年[1728]申六月九日ニ死ス 追号〔**釈了貞信士**〕——

〔**信國五左衛門吉光**〕宝暦十四年[1764]巳[ママ]年十一月二日死ス 追号〔**釈嶺從居士**〕 七十二才——

父〔**信國勘四郎**〕職分断絶ニ付 倅〔**吉光**〕下座郡小田村〔**信國傳四郎吉延**〕ニ入門而鍛冶職習〔**吉延**〕早世故、倅〔**彌兵衛**〕幼少ニ付後見、三箇年程相立職分教エ仕コミヨ〔**吉延**〕の後妻ノ〔**連**〕當村エ引取鍛冶職ヲ仕込也

一、故有而父〔**信國勘四郎**〕倅同様之子有 倅〔**吉光**〕ニ職分ヲ仕コマセ父申付有無拠職分教エ〔**柳原忠三郎**〕ト改名サセ當所 宮本エ別家居仕也

〔**信國伊衛門吉次**〕後〔**立花源右衛門**〕殿家士ニ被召抱石武人被下候事 寛政六[1794]壬寅十一月廿八日死 追号〔**釈教榮居士**〕

〔**信國勘兵衛吉種**〕〔**吉次**〕弟 同所ニ鍛冶居住別家 享和三[1803]亥四月十九日七十五才死ス 追号〔**釈正泉居士**〕

〔**信國九平吉長**〕文化八[1811]未年四月十二日六十六才死ス 追号〔**釈超願居士**〕——

〔**信國和平吉忠**〕鍛冶断絶 天保九[1838]戌十二月晦日六十七才死ス 追号〔**釈常彌**〕

〔**信國和七吉春**〕高石屋敷鍛冶別家 安政三[1857]丙辰年十一月五日死ス 追号〔**釈入藪居士**〕

〔**信國彌平吉廣**〕後〔**大音之君**〕ヨリ被召抱〔**加藤勘四郎**〕ト号ス 八十才にて死ス追号〔**釈西證定居士**〕——

〔**信國伊衛門吉定**〕文化五年[1808]八月日 福岡〔**信國平助義直**〕ニ入門シテ秘傳シ往古之姓被下候

〔**信國勘三郎**〕鍛冶文政之頃[1818-30]断絶

〔**信國彌平吉誠**〕——〔**信國定助吉廣**〕明治七年[1874]葵戌五月黒川村而六十六才死ス

〔**信國彌三郎吉成**〕後同郡黒川村居住安政六年[1860]十二月之頃

〔**信國伊助吉穉**〕後〔**信國勘四郎**〕ト改名ス 後々〔**信國四郎**〕ト改名ス明治二年[1869]己巳八月ニ改八十三才之時 明治六年[1873]七月八十六才死ス 追号〔**一如釈蓮燠信士**〕

〔**信國伊衛門吉忠**〕安政二年[1856]卯二月六日〔**信國又左衛門吉直**〕ニ入門シテ鍛冶秘傳口口請爰ニ記就而ハ 文久三年[1863]亥五月二日〔**吉直**〕ヨリ飛脚参リ御状表御両侯御献納鎗拾本〔**西町濱**〕ニテ打立有無記以之 明治元年[1868]ニ後〔**信國六郎七**〕ト改名ス 五十三才之時改ル 明治二年[1869]己巳春月山流鍛刀打也

〔**信國伊助吉秀**〕後〔**信國順三郎**〕ト改名ス 明治七年[1874]癸戌ノ十一月四十三才死ス 追号〔**釈善教信士**〕——

〔**信國四郎右衛門吉重**〕後〔**四郎八**〕ト改名ス 明治七年[1874]癸戌十一月吉日〔**信國伊八**〕ト改名ス 又〔**四郎八**〕トナノリ也 明治十二年[1879]卯三月〔**吉穉**〕ト改名ス印判共改メ

〔**信國六太郎吉長**〕後〔**信國六四郎**〕ト改名ス 明治七年[1874]癸戌十二月十三才死ス 追号〔**釈法月信士**〕

〔**信國郷太郎吉胤**〕明治六年[1873]十一月出生

〔**信國釵次郎**〕明治十一年[1878]寅十月出生 信國釵次郎

史料 3)「吉田治年勤事之章.16」(『吉田家伝録』p.783-793 所収<sup>8</sup>書誌) (「前号」史料 4<sup>注1</sup>全文)

〔徳川吉宗〕の『享保諸国鍛冶御改』（国立公文書館<sup>9</sup>）で葵紋を切ることを許可された〔信国重包〕（助六）(-1729)の経緯を福岡藩家老〔吉田治年〕が記した。概略の現代語訳を以下に示す(p.789)。

〔助六〕は〔京信国〕より〔助六〕迄、十五代の系譜や〔吉次〕・〔吉包〕の関係を申し上げた。吉次は助六の祖父、吉包は助六の親。後日「書付」を御城へ差し上げた。(中略) 享保十三年[1728] 十二月十一日に〔助六〕は病死(中略) 翌十四年三月、助六に下した切扶を伴〔勘助〕に下した。(中略) 同十八年七月、〔信国勘助〕病死。幼子〔儀平〕へ扶持を下され、町方支配し、成人後家業御用でできれば切扶を返す。その間、信国親族〔信国弥九郎〕(〔重久〕こと〔平四郎])が後見するよう、月番〔立花勘左衛門〕が町奉行へ申し渡した(中略)

史料4)「信国助六提出信国系図」(略称「助六記」)(史料3:吉田治年勤事之章.16『吉田家伝録』p.793所収)



私(吉田治年)に云う、この系図は助六・信国平四郎の伝聞を記し詳しくないが、『鍛冶記』にある故、ここに写す。(後略)

- 『吉田家伝録』巻二十六, p.592-595 享保五年項、前年に行われた「打物鍛冶」の調査記録  
 於筑前国打物仕候鍛冶之覚  
 歳四十七 〔信国助六重包〕(朱筆)此者打物仕候 正徳七年(元年[1711]年カ)朝鮮人江被下候太刀被仰付 作り申候  
 右ハ信国之末只今ニ到打物仕候

歳二十五〔信國平四郎重久〕、〔信國源兵衛包次〕、歳五十八〔權三兵衛守次〕、守次子歳三十四〔三兵衛守昌〕（後略）

史料5) 貝原益軒編『筑前國統風土記、卷 29: 土産考上』(略称「益軒記」) 書影:福岡県立図書館<sup>1)</sup> 書影<sup>2)</sup>  
 (「前号」史料7)

長政公入国の後、〔信国〕などの鍛冶を招いて福岡に居住、兵器を作らした。信国は京信国が末裔。故に代々信国を以て家号とした。京信国は五条坊門に住み三代鍛冶。四代の信国故有って豊前宇佐に下り、〔安心院吉門〕に寄託した。〔吉門〕の名乗の字〔吉家〕と号した。〔宇佐信国〕の元祖也。九代安心院に仕える。安心院は天正の初、豊後〔大友〕より攻亡され断絶。その時〔信国吉貞〕も流浪の身となる。〔黒田高孝〕公が豊前を領して後、信国を招き兵器を作らせた。〔長政〕公、筑前へ移る時、信国吉貞を召して、我跡を慕い筑前に来るべしとして米穀を給った。慶長七年二月筑前に来り、月俸を給わり、居宅白銀を恵み、厚く遇した。吉貞男子三人あり。子孫今に至る迄三家に分かれて鍛冶也。嫡家〔吉次〕、〔吉包〕、今〔重包〕に至る。吉次は次男だが治工の伝を受くる故、嫡家とした。〔吉政〕は嫡だが、備前に行き別伝を受けたので、嫡流とせず。其次、又〔吉政〕今〔重宗〕に至る。吉貞か三男、〔吉助〕、〔吉貞〕、今〔重貞〕に至った。(中略)

史料6) 「信國藤五郎述信國系図」(略称「藤五郎記」) (「前号」史料8)

史料4「助六記」を継承している故、十二代〔信国吉貞〕から記載する。

信國系圖

十二代信國

〔助左エ門吉貞〕 また〔吉定〕とも打つ。(中略)〔長政公〕が豊前拝領の節召抱えられ、筑前拝領の節御知行三百石下さる由、妻子と引越す。米六十石拝領と仰せ付けられ、慶長五年〔ママ〕二月十一日彦山へ参詣と申して豊前を立退き、御國へ罷り越したところ、屋舗を拝領され居住した。〔以下原文〕

十三代〔信國勘助吉次〕ト打

〔信國平四郎吉政〕ト打 — 〔信國平四郎吉政〕ト打 — 〔信國平四郎重宗〕ト打 — 〔信國平四郎重久〕ト打  
 — 〔信國平兵衛〕 南部山城守様江参御切扶ニ而勤  
 — 〔信國次郎兵衛〕 南部山城守様江参知行二百石ニ而奉公仕

〔信國孫四郎吉助〕 — 〔信國作左エ門吉興〕 — 〔信國源市吉親〕

十四代〔信國助左エ門吉包〕 法名如劔

十五代信國

〔助六重包〕ト打 吉ノ字用來候処〔光之公〕御意ニ而重包ト被為仰付其後名乗ヲ除ク信國ト打申候様仰付之

〔信國次郎左衛門〕 江藤氏の養子トナル

〔信國次郎平〕

〔信國又平〕 — 〔又作〕 — 〔仁太郎包利〕〔信國勘十郎茂包〕家ヲ継

— 〔忠衛門〕 — 〔孫市〕 — 〔藤五郎吉清〕〔信國仁太郎包利〕家ヲ継

十六代信國〔勘助吉包〕 — 十七代信國〔勘十郎茂包〕 — 十八代信國〔仁太郎包利〕 — 〔藤五郎吉清〕

(後略)

藤五郎吉清

史料7) 「信國勘助系図」(『刀劍美術』270号 p.28-29 所収)<sup>11)</sup>書誌

十九代〔信國藤五郎〕を継いだ二十代〔信國行國〕から二十四代正戴(松田勇雄)までをも記した系図。史料6に十二代〔吉貞〕から十七代までの戒名を加えている。十四代は法名〔如劔〕から〔安国禪寺〕過去帳と同様の〔夢住如幻居士〕に変化している。また、字体を再確認した結果、十九代〔藤五郎吉清〕〔法名無し〕に二十代〔信國又左〕から継ぎ足し、二十一代〔廉之助〕は貼り紙上に記入、二十二代〔重戴〕から別筆である。

十二代信國〔助左エ門吉貞〕 寛永七庚辰(ママ)[1630]九月朔日 〔昌翁宗繁居士〕

十三代〔信國勘助吉次〕 寛文三癸卯[1663]七月廿日 法名〔実州良参居士〕

十四代〔信國助左エ門吉包〕 元禄六癸酉[1693]八月廿二日 法名 〔夢住如幻居士〕

十五代〔信國助六重包〕 享保十三戊申[1728]十二月十日 法名〔撥塵如劔居士〕

十六代〔信國勘助吉包〕 享保十八丑[1733]五月二日 〔教外智道信士〕

十七代〔信國勘十郎茂包〕 宝暦十四[1764]甲申三月六日法名〔直心是性信士〕

十八代〔信國仁太郎包利〕 〔戒名無し〕 十九代〔信國藤五郎吉清〕 〔戒名無し〕

二十代〔信國又左〕 初而〔正義〕ト打、後ニ〔定國〕ト打其後〔久國〕ト打終ニ〔行國〕ト打也〔下村信八〕之男  
〔水心子正秀〕之門人也 七十七歳ニ而卒ス 法名〔本来鍛劔居士〕

〔信國七左衛門定國〕 早世 行年三十才 安政五[1858]年八月十四日 法名〔大然道光居士〕

廿一代 〔廉之助〕 慶應元(1865)年十二月十五日〔行國〕之跡ヲ継、十一才ヨリ相勲ル

廿二代 信國(正吉之ヲ継 〔信國重戴〕ト打チ行年六十四歳 明治三十一(1898)年三月 法名〔得峯寿山禪士〕  
松田家ヨリ出ズル)

廿三代〔信國久米吉〕 〔松田正吉〕ノ次男也

廿四代〔信國正戴〕 〔松田勇雄〕、松田正吉三男、鍛伝ヲ受ケ〔信國重戴〕之跡ヲ継、信國正戴ト打

史料8) 守次則定藏「信国系図」(略称「守次信国系図」)(福永醉劍「筑紫戒・信国考」続(『麗』no.297, p.6 所収。略称「福永信国」)<sup>12)</sup>書誌) 「前号」史料6)

四代信国 徳千代 吉家ト改名 宇佐郡安心院吉門ニ属ス

信国又八郎 京都ニテ早世

五代〔吉包〕——六代〔吉政〕——七代〔吉勝〕——八代〔吉成〕——九代〔吉成〕(恒吉)——十代〔吉盛〕

十一代〔吉秀〕——十二代〔吉貞〕〔黒田長政〕ニ仕テ筑前へ移住

史料9) 略称「平助記」(『長政公御入国』二百年町家由緒記』略称『町家由緒記』p.38-41 所収)<sup>10)</sup>書誌)

史料6「藤五郎記」の次に史料1)「吉貞記」の全文(「前号」史料1(p.36-38)参照)と「平助記」が入る。

「御尋ニ付申上口上之覚」

一 私先祖江

〔長政〕公ヨリ御知行被為 仰付置候者 〔御笠郡有知山村〕ニ六拾石御頂戴申上居候儀承リ伝候 尤御書付之儀者 先年大火之節 焼失仕候 已上

申[1798]三月

[信國平助]

御町御役所

元祖〔**信國吉貞**〕 二代目〔**平四郎吉政**〕 三代目〔**平四郎吉政**〕 四代目〔平四郎重宗〕

五代目〔**平四郎吉政**〕 六代目〔**弥九郎重久**〕 七代目〔**又左エ門光昌**〕 八代目〔**平助美直**〕

【札付】

〔平四郎吉政〕ハ〔助左エ門吉貞〕家を相続居候哉又者〔吉政〕より別家ニ相成〔吉貞〕家〔勘助吉次〕相続いたし居候哉 今一度相調へ可被申出候

○右朱書之札付達候依而此通申出候事

申上口上之覚

私家代々相続仕居申候趣委申上候様猶又被仰付奉畏候則左之通ニ御座候

一 元祖〔助左エ門吉貞〕 相続之男子〔平四郎吉政〕 同人相続之男子又〔平四郎吉政〕 同人相続之男子〔平四郎重宗〕

同人相続之男子又〔平四郎吉政〕 同人相続之男子〔弥九郎重久〕 同人相続之男子〔又左エ門光昌〕 同人子私迄ニ而都合八代ニ相成申候 尤〔勘助吉次〕と申モ最初〔平四郎吉政〕 第二而御座候 いつ之比ヨリ別家ニ相成居候哉 委敷儀 系図 等志ラへ申候へ共 一円相分り不申候 以上

申六月

信國平助

〔信國平助美直〕は天保二年(1830)年五月卒、法名「鐵翁道明居士」(〔安国禪寺〕過去帳：詳細は後述)。系譜は史料10「続風土記附録」に詳しい。役場からの札付は「〔吉政〕は〔吉貞〕家を継いだのか別家になったのか、〔勘助〕が〔吉貞〕を継いだのか、もう一度調査し提出せよ」とのことである(養父〔光昌〕から聞かされていなかったか)。

史料10) 鷹取周成編『筑前国続風土記附録.卷四十七』土産考(略称「続風土記附録」という)上<sup>13</sup> (書影口) p.100-102 所収)

貝原益軒『筑前国続風土記』(史料5)を本編として、藩命により〔加藤一純〕補遺〔鷹取周成〕補助の記録。寛正七年(1793)脱稿。

器用類 刀 正應・西蓮・盛国・信国・下坂・則宗か遠孫等のこと皆本編に詳也。(中略)

・〔**信國**〕か事本編に詳也。今信國か家系を見るに、裏祖〔**國吉**〕は粟田口に住せり。六代目を〔**信國**〕といひ、假名を〔**長谷部式部丞**〕と號し、京五條坊門に居れり。〔式部丞〕より四代の信國(幼名**徳千代**後に〔**與左衛門**〕と称す。家系に詳なり)。〔**後花園帝**〕の御宇[永享元(1429)-12(1440)年]、御劔を鍛ひて献る。此時源姓を賜りしとそ。永享十二年[1440]〔**安心院吉門**〕か招にて豊前にくたり、〔**吉家**〕と改めしと云。此事本編にも見へたり。吉家より十一世孫〔**助左衛門吉定**〕は〔**長政公**〕に従ひ、文禄元年[1592]年朝鮮に渡り、彼國にて袋鑓を鍛へせ給ひしといふ。其子〔**平助吉貞**〕(後〔**平四郎吉政**〕と称せり。〔**長政公**〕の政の一字を賜ひしといふ)は、長政公の命に依て備前國に至り、〔**一文字助宗**〕か弟子となる。梁か傳と又〔**来國行**〕か傳、鎌倉〔**正宗**〕か傳とを合て三傳を一代鍛へりとそ。吉政より七代〔**光昌**〕〔〔**常四郎安俊**〕か子〔**弥九郎重久**〕か養子〔**又左衛門**〕と云)男子なく〔**平助美直**〕(初〔**長兵衛**〕と称す)を養て嗣とす。これ本編に見へたる三家に別れたる嫡家也。委しき事は系図に出たり。ここに略す。〔**光昌**〕・〔**美直**〕ともに良工也。寛政六(1794)年〔**斎隆公**〕命して光昌・美直を藩廷にめし、刀を造らせ見給ふ。其時鍛ひし刀を江戸にて目利する者に見せ給ふに稱誉しけるとそ。又美直よく鑢を造る。世人これを稱誉す。この家吉定より代々俸禄厚く賜はりたりしか、重宗幼少に

して家を續たりし故、月俸を減して二口を賜ひしか今もしかり。

信國重包（助左衛門と號す後助六正包と云）享保の比、將軍吉宗公の台命にて江戸濱の御殿の御庭において若狭正宗・不動國行の御刀の模しを鍛へり。甚御褒美ありて葵の一葉の繪型を重包一代?(はばき)の下に刻む事を御免あり。重包良工なるのみならず、此度江戸にての譽を國君殊に賞し給ひ、新に俸禄（十五石五人扶持）を賜ひ、下士の列に加え置かる。重包か子勘助相續していく程なく死せり。其子磯之助（助左衛門茂包と改む。後に勘十郎と云）幼稚なりし故に、四口の月俸を賜ふ。漸長して後狂疾にて自殺せり。重包か家は助左衛門吉定か二男吉次を祖とし、茂包に至り四代にして其家絶ぬ。本編に吉次は二男なれとも嫡家とすとあれとも、家系には其事見へず。茂包か弟子某（仁太郎と云）家業を継しか僉工也。是も早世して其嗣なし。

信國吉助（孫四郎と云。吉定か三男也）か家は、三代吉親（源市と云）に至りて断絶す。本編には吉助・吉貞今重貞に至るとあり。家系に吉貞後に重貞と改むと記せり。

信國吉正（権三郎と云。後安吉と改む。吉定か四男也）は秋月に行り。四代安貞（初権三郎と云。後常四郎安俊）に至り福岡に来る。其子俊壽（初名左太郎）櫻町帝御宇[元文(1734)・延享 4(1746)年]上京して寶劔を鍛ふる。依叙従五位下任大和守といふ。二男光昌ハ嫡家重久か養子となる。

#### 史料 11) 『到津文書』 14書誌)

〔宇佐神宮〕権宮司〔到津家〕の文書。元和七年(1621)、{豊前国}の〔信國久右衛門〕が p25,p114にある。

天和[ママ]七年七月七日 一 大脇差 〔信國久右衛門〕自作也 大宮司公兼 花押 (中略)

元和四年[1618]七月七日 長太刀

元和七年[1621]七月七日 大脇指壹腰 延國久右衛門自作 (中略)

#### 史料 12) 『長野日記』(『近世福岡博多史料』 / 〔秀村,選三〕編：第1集所収) 15書誌)

〔福岡藩〕右筆頭取〔長野源太夫〕の日記。元禄八年[1695]~享保廿年[1735]の記録。〔信國〕関連は以下の事項。

〔信國助六〕享保五年~六年(p.222-224) これは史料3『吉田家伝録』と重複するので省略。

〔信國勘助〕「享保十四年[1729]二月 亡父〔助六〕跡式、無相違五人拾五石被下〔信國勘助〕御城代組被仰付、家業弥出精可申事、右〔六郎太夫〕申渡之 (中略) p.275

〔信國磯平〕「享保十八年[1733] 祖父〔助六〕先年江戸へ被招呼、公義御用勤、罷下り候以後、御切扶被下御城代組ニ被差加、其後病死、倅〔勘助〕相續被仰付候処、勘助儀も致病死、〔磯平〕儀幼稚之者ニ付、家業相續為仕、以前之通町支配被仰付、四人扶持被下置候、一族之者ニ付、〔信國弥九郎〕後見致候様被仰付〔信國勘助〕倅〔磯平〕但、先年〔助六〕へ公義より被下置候一葉之絵形、〔磯平〕幼稚之者故、差上置候様被仰付、成長之後家業宜仕候ハ、其節可被差候、以上(p.326)

#### 史料 13) 『黒田新統家譜』(『新訂黒田家譜』所収) 16書誌)

黒田家の公式記録をまとめ現代語訳に校訂したもの。数巻に分かれる。〔信國重包〕関連は藩の一大慶事により「吉田家伝録」、「長野日記」他に詳しい故、〔重包〕以外の関係部分のみを記載する。

○明暦二年[1656]〔黒田光之〕「光之入国の慶賀として(中略)二月二十五日、〔大音六左衛門〕か家に来駕し給ふ。各刀・時服を賜へる。〔平左衛門〕[〜]〔信國〕」(巻之一 p.250-251)

○明和五年[1768]〔黒田継高〕「本丸に祠を建て長政を祭る記事」：「八月二日刀脇指ハ〔信國光昌〕、〔又左衛門〕に命して作らしめらる。刀ハ藩祖の常に佩給ひし《二字國俊》をうつさる。(後略)」(卷之三十二 P.446-447)

○寛政五年[1793]十一月七日「劍匠〔信國長兵衛美直〕を館に召出し大書院の庭にて刀を鍛せ(中略)父〔又左衛門光昌〕後見す。(中略)〔黒田齊隆〕,,,江戸にて音信贈答の品ハ、悉く國産を用ひて足りぬへし。中にも〔信國〕〔左文字〕などへ刀劍の類ひを作らしめ、參勤土産の第一に為持なハ、年々に餘分の刀劍を鍛ふ事故、おのつから鍛鍊を積て、妙手となるへし。さらハ子孫門人追々其術を傳へ、良工多く出すへしとの意なりけるとそ」(卷之四十一.p.251-2)

○文正三年[1820]九月二日〔黒田齊清〕「夜早良郡姪濱驛失火(中略)〔長順〕より祈願の為に(中略)太刀一腰(〔信國美直〕か作にて黒作左右巻也)を〔澳津宮〕〔宗像大社〕に納め給ふ」(卷之四十三 P.289)

○安政二年[1856]大阪町人左之者共へ如左記被下。《筑州源信國義昌》行年七十歳長一尺五寸,,,《源信國義昌作》長一尺三寸一分,,,

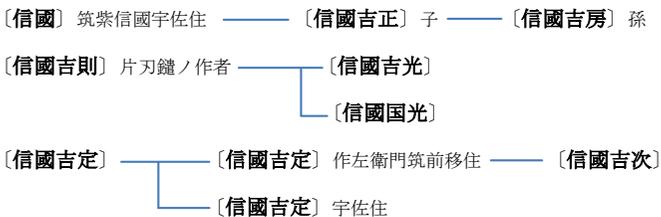
《筑州住源信國重包作》長一尺五寸七分,,, (綱領八 p.238)

○安政四年〔広瀬久兵衛〕如左脇差一腰被下 脇差〔信國久國〕一腰 (綱領九 p.254)

## 2.2 刀劍鑑定書等

史料 14) 『如手引抄』 11 卷抜粹 (史料 8 「福永信国」 参照)

寛永十九年[1642]奥書、調査手法は不明だが、豊前国は〔福永醉劍〕氏が系図式に記載した。



史料 15) 仰木伊織編『古刀銘尽大全』 17 全文

〔仰木伊織〕が寛政四年(1792)に伝書等をまとめた書。〔本阿弥長根〕は『校正古刀銘鑑』 資料 12) で「誤り多し」と否定した書。三代〔吉助〕と四代〔吉定〕は年代的に順序が逆か。

{豊前國}



史料 16) 『雲智明集』 18 書誌

解説は「前号」史料 17。本史料は古刀期を記している。従って〔筑紫信国〕は〔豊前信国〕分が掲載されている。

豊前國 〔能真〕 >> 國住 了戒 >> 作 文明十年[1478] 〔信國〕 豊前宇佐住 >> 長祿二年[1458]

〔信國〕 >> 宇佐住 天正二年[1573] 〔吉助〕 >> 宇佐住 《信國吉助作》 明暦二年[1656]

資料 17) 石井昌国記述「筑州信国吉政家系図」(略称「昌国記」) 19)(写真 1)

解説は「前号」史料 22。ここでは、宇佐初期から筑前まで記述する。石井先生は系図添付書簡に「(前略) 現地の系譜と照合しなければなりません(後略)」と示されている。〔吉政〕系なので〔吉次〕系は

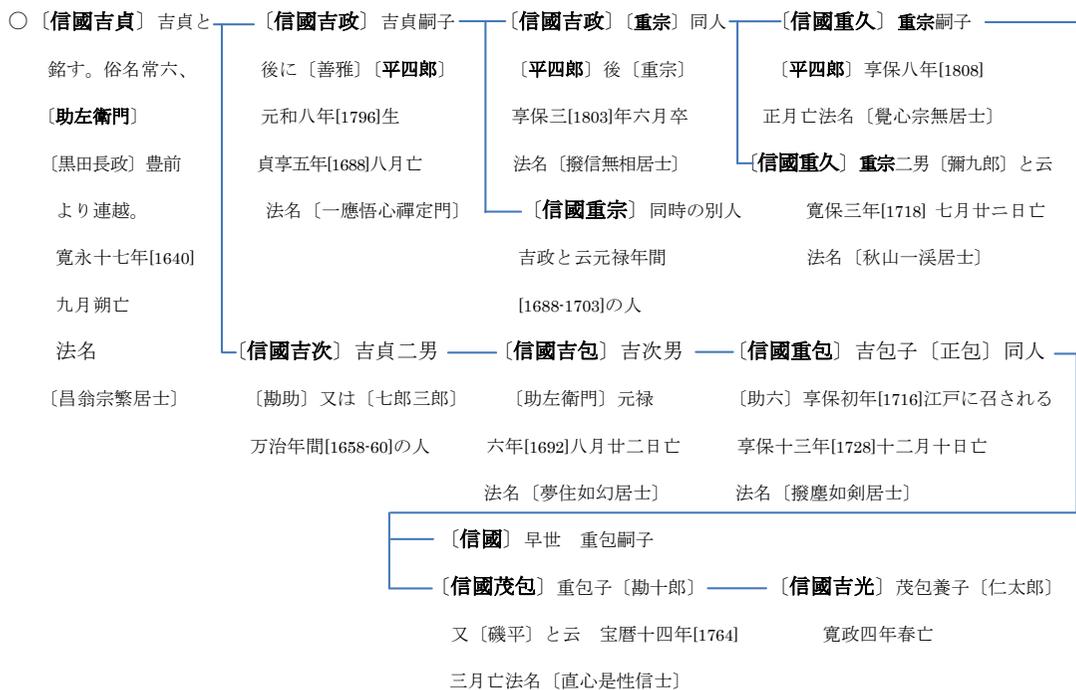
かは省略されている。



資料 18) 川口陟著『新刀古刀大鑑』下(略称「川口大鑑」) 20 書影口)

鑑刀家〔川口陟〕氏が調査し、昭和五年[1930]発行の刀剣大鑑。記事「筑前信国一派」(コマ 445-450)は、郷土の鑑定家〔井上秀吉〕氏らが材木町〔安国禅寺〕過去帳を含め調査したもの 21 書誌)。

〔信国光昌〕(天明年間[1781-88])—〔信国義直〕(明治五年[1872])と続くのは欠落と推定される。〔信国安俊〕系と〔信国平助〕系がその間に続くとは推定されるが、戒名の同定をも含め、後述する。



〔信国光昌〕安俊二男重久養子〔又左衛門〕—〔信国義直〕〔長兵衛〕又は〔平助〕—〔信国義昌〕〔又左衛門〕又は〔又四郎〕  
又は〔助左衛門〕安永七年[1778]五月隠居 明治五六年頃[1872-73]亡 明治六七年頃[1873-4]亡  
天明年間[1781-88]亡

○〔信国〕吉次同時代〔勘助〕—〔信国〕吉包同時代〔佐左衛門〕—〔信国〕重包同時代〔作左衛門〕と云  
と云寛文三年[1663]七月廿日亡 延寶三年[1675]九月十四日亡 寶永五年[1708]八月廿九日亡  
法名〔實州良恭(ママ)居士〕 法名〔菊窓道光居士〕 法名〔心力(ママ)破愁居士〕

○〔信国吉助〕〔六太夫〕—〔信国吉寛〕吉助男〔平兵衛〕—〔信国重貞〕〔作右衛門〕—〔信国包次〕〔次郎左衛門〕又は  
又は〔孫四郎〕 元禄年間[1688-1703] 又は〔作左衛門〕元禄年間 〔長久〕と云享保年間の人  
万治[1658-60]より 〔信国吉重〕吉助三男〔次郎左衛門〕又は〔次郎兵衛〕  
寛文[1661-72]までの人 後〔奥州南部〕に移住

○〔信国吉種〕元禄年間[1688-1703]の人

○〔信国安俊〕〔常四郎〕又は—〔信国吉貞〕〔重貞〕〔作左衛門〕—〔信国俊壽〕剃髮し〔江樹〕—〔信国光正〕〔又左衛門〕  
〔権三郎〕〔秋月〕より来る 前の吉貞と別人明和 大和守 明和四年[1767] 文化元年[1804]七月  
〔材木町〕住宝暦[1751]元年 九年[1772]八月十二日亡 四月十三日亡 十八日亡 法名  
三月十八日亡 法名〔楓山知工信士〕 法名〔左石庵江樹〕 〔百練斎哲翁居士〕

○〔信国〕〔平助〕と云—〔信国〕〔又左衛門〕—〔信国定国〕〔七左衛門〕〔定国〕—〔信国正助〕

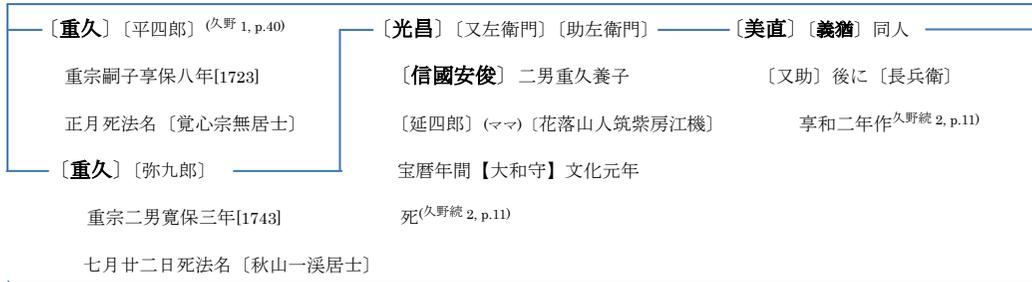
天保二年[1831]五月 廿二日亡 法名 〔鐵翁道明居士〕	嘉永六年[1853]十一月 九日亡 法名 〔霜林浄宗律士〕	安政五年[1859]八月十五日亡 行年三十歳、法名 〔大然道光居士〕	安政六年[1860]七月 十七日亡 法名 〔正安宗白善士〕
-------------------------------------	-------------------------------------	--	-------------------------------------

**資料 19)** 久野繁樹著「筑前新刀の研究」(一)(『刀剣美術』52号所収) 22書誌)略称「久野 1」、(二) 23書誌)略称「久野 2」、(三) 24書誌)略称「久野 3」、「続筑前新刀の研究」(一)(『刀剣美術』64号所収) 25書誌)略称「久野続 1」、(二)註 20書誌)略称「久野続 2」)

筑紫刀の鑑定家〔久野繁樹〕氏が〔筑前信国派〕ほか筑前新刀を研究し、雑誌『刀剣美術』に掲載したシリーズ。〔筑前信国派〕は 1-3 回、「続筑前新刀の研究」1-2 回掲載している。彼は、資料 14)「川口大鑑」の〔信国光昌〕—「信国義直」の欠落等を「でたら目」注 20p.12 書誌)とし、刀工〔森岡朝尊〕の『新刀銘集録』(安政四年[1858]刊)の以下の系図中、〔信国光昌〕以降分や史料 6)「藤五郎記」を参考に、実見の刀剣を鑑定し系図を推敲している。以下の〔信国吉政〕系の久野氏分は全号をまとめ、個々に典拠を示した。戒名の同定を含め詳細は後述する。

森岡: (前略)〔光昌〕——〔義猶〕——〔義昌〕——〔義秀〕〔平四郎〕 弘化[1818-30] —〔義直〕平太郎慶應[1865-67]  
安永頃[1772-80] 享和頃[1801-03] 文政頃[1818-30] —〔正次〕 義昌門人田中平右衛門 弘化 嘉永[1848-54]

久野:〔吉貞〕——〔吉政〕〔平四郎〕——〔吉政〕二代〔平四郎〕——〔吉政〕三代、初め〔平助吉政〕——  
寛永十七年 〔助左衛門〕〔善雅〕承応二年 元和八年[1622]生 後〔平四郎重宗〕享保三年[1718]死  
[1630]没 十二月四日死(久野 1, p.36) 貞享五年[1688]八月死 法名〔発心無相居士〕(久野 1, p.36)  
法名〔慶雪常快居士〕 法名〔一應悟心禅門〕(久野 1, p.36)



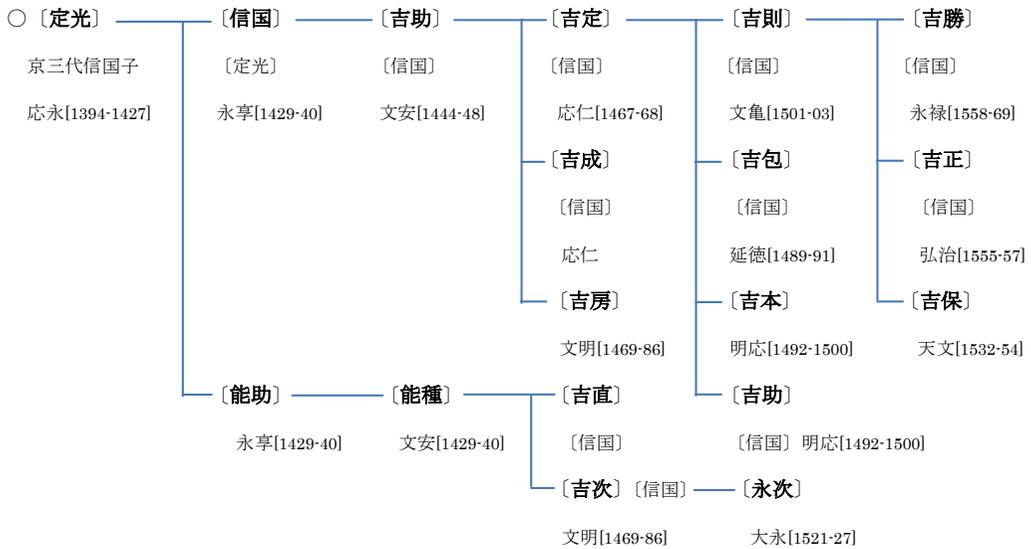
〔義昌〕〔又四郎〕後〔又左衛門〕——〔義一〕義秀同人〔又左衛門〕——〔義直〕平太郎後〔又左衛門〕  
文政四年、天保八年、嘉永六年作 嘉永、安政、文久の作 安政、元治、慶応作、明治五年死  
嘉永六年十一月死か (久野 1, p.45) (久野 1, p.45)  
法名〔霜林浄宗律士〕か、(久野 1, p.45)

**資料 20)** 常石英明『日本刀の研究と鑑定』古刀編 p.447-448(略称「常石古刀編」) 26書誌),新刀編 p.243(略称「常石新刀編」) 27書誌)、p.372(略称「常石新々刀編」)

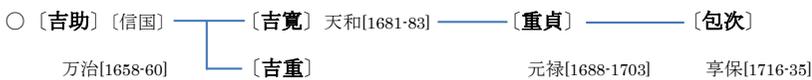
刀剣研究者〔常石英明〕氏が典拠を明示し、定説と自身の見解を加えた刀剣鑑定書。

〔豊前信国派〕(「常石古刀編」p.447-448)

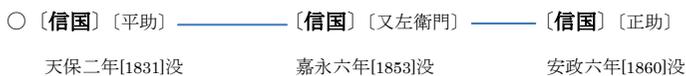
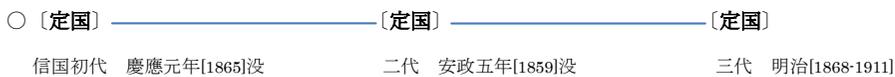
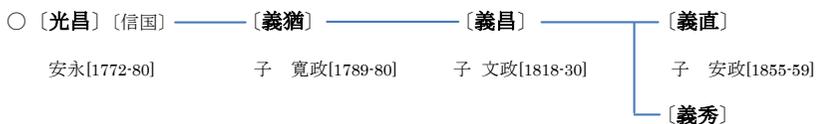
刀匠信国系図の総合的研究



[筑前信国派] (「常石新刀編」 p.243-246 系図に本文記載分を追加)



[筑前信国派] (「常石新々刀編」 p.372-373)



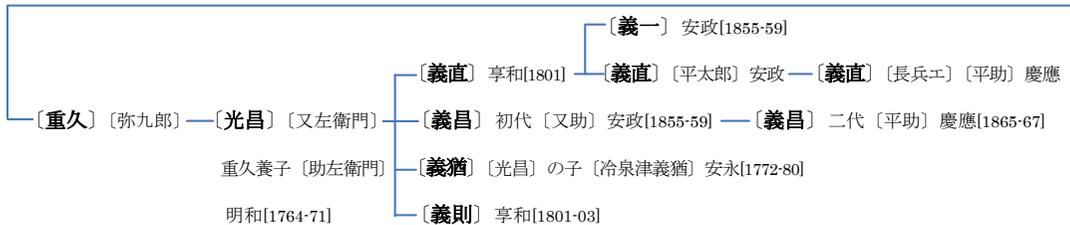
資料 21) 八尾敏則氏作「信国系図」(略称「八尾記」) 28)写真2

〔八尾敏則〕氏が作成した系図2枚。史料6「藤五郎記」を参考に初代〔吉貞〕長男〔吉政〕系では〔光昌〕まで、次男〔勘助〕系では〔吉清〕まで、三男〔吉助〕系は〔吉親〕までを記し、史料10「続風土記附録」を参考に四男〔吉正〕(〔権三郎〕後〔安吉〕秋月へ移住)の系統をも記している。

○〔吉貞〕四男〔吉正〕----四代〔安貞〕初〔権三郎〕後〔常四郎〕----〔俊壽〕安貞子〔左太郎〕上京後叙従三位下任大和守〔安俊〕(福岡へ戻る)----〔光昌〕安貞二男 嫡家〔重久〕が養子となる

また、2枚目の系図には典拠は示されていないが、〔吉政〕系では〔光昌〕以降も記されている。

○〔吉貞〕初銘〔吉定〕寛永〔1624-44〕  
 〔吉政〕初代〔平四郎〕----〔吉政〕二代〔平四郎〕----〔吉政〕三代〔平四郎重久〕----〔重久〕四代〔重宗〕  
 吉貞長男寛永 初代の弟 寛文〔1661-72〕 〔平助〕貞享〔1801-03〕 〔平四郎〕正徳  
 〔吉次〕(以下略) 〔吉政〕〔助左衛門〕享保----〔吉秋〕元文〔1736-40〕  
 〔吉助〕(以下略) 〔吉重〕天和〔1681-83〕



資料 22) 福岡県立文化会館蔵「信国系図新々刀期」

○〔信国〕平助天保三年〔1832〕没----〔又左衛門〕嘉永六年〔1853〕没----〔定国〕七左衛門安政五年〔1859〕没----〔正助〕安政六年〔1860〕没

3 在銘と考察

3.1 〔宇佐信国〕関連

「吉貞記」は類火後の覚書で、〔宇佐信国〕については、最も信頼性が高い「柳原系図」、「守次信国系図」を軸に、既出史料や以下の銘鑑類を参照し考察する。

- 〔藤代義雄〕著『日本刀工辞典』新刀扁(略称「藤代」) 29)写真⑨) 刀剣研磨師で刀剣商の故藤代氏の辞典。
- 〔本間薫山〕、〔石井昌国〕編『刀剣銘字大鑑』(略称「本間銘字」) 30)書誌:解説は「前号」資料 20
- 〔石井昌国〕編『日本刀銘鑑』(略称:「銘鑑」) 31)書誌:解説は「前号」資料 21
- 〔福永酔剣〕編『筑紫了戒・信国考・続』(前掲史料 8):解説は「前号」資料 6。

豊前信国銘の特徴は「国」字の終画は「へ」である(「本間銘字」p.80)画像:倉敷刀剣美術館:宇佐信国 32)画像⑩)。

系譜:〔信国吉家〕〔定光〕1446年没〔義山勇雪〕----〔信国吉正〕1464年没〔白雪良山〕----〔信国吉種〕1459年没〔鐵無心〕----〔信国吉包〕1501年頃〔一山〕----〔信国吉勝〕追号雪山 永正之頃〔1504-20〕----〔信国吉成〕〔治郎左衛門〕追号雪山 天文之頃〔1532-54〕----〔信国恆吉〕〔平左衛門〕追号宗微 永祿之頃〔1558-69〕----〔信国吉秀〕〔亦左衛門〕慶長之頃〔1596-1614〕----〔信国吉盛〕

① 太刀:銘「信国」〔宇佐八幡宮〕蔵(宇佐市指定文化財一覽) 33)全文

- ② 1453年：銘「豊前國宇佐住 信國吉正」裏銘「享徳二年」（「福永信国」p.5 画像なし、「石井銘鑑」p.1164,65 では山城か）
- ③ 1466年：【刀】銘「信國」。（「本間銘字」p.85 では「銘字の太刀に表《信國》裏に「成化二年九月（〔明〕の元号）（以下切）」と切る二尺二寸五分の貴重な資料がある」と記される。また、p.84 では「このころの宇佐信国は長禄二、文正元年記のある〔信國吉家〕の時代で、この工の作に有名な成化二年紀の作がある」と記される（『戊子入明記』に関連記事あり<sup>34</sup>全文）。しかし、「柳原系図」では〔信國吉家〕は「文安三[1446]年死ス」とある。従って、〔吉家〕であれば、文正元年作は「柳原系図」にある〔吉包〕文龜之頃[1501-03]—〔吉勝〕永正之頃[1504-20]、あるいは「守次信国系図」の五代〔吉包〕、六代〔吉政〕、七代〔吉勝〕が〔吉家〕をも名乗ったことも考えられる。「昌国記」では〔信國吉久〕長禄二[1458]成化二[1466]を比定している。
- ④ 1467年：銘「信國」裏銘「文正二年」（「福永信国」p.5）。
- ⑤ 1474年：【脇指】銘「豊前宇佐住信國」裏銘「文明六甲午年八月」（「本間銘字」p.86 では「〔宇佐住〕とあるのは永享三、長禄二、文正元、天正二年紀のみであったが、ここに文明六年が加えられ（中略）成化の太刀はこの作者ではなく、その先代であろう」と記される。「昌国記」では〔吉包〕を比定）。銘「信國」裏銘「文明六年」（「福永信国」p.5 は、③と同作と推定される）国字の終画はこの頃から「へ」から「一」に戻る。
- ⑥ 1487年：刀 62.7cm 銘「信國」裏銘「文明十九年（以下切れ）」〔福岡市博物館〕蔵『赤羽刀』p.67<sup>35</sup>書誌
- ⑦ 1488年：銘「信國」裏銘「長享二年」（「福永信国」p.5）。
- ⑧ 1488-96年：銘「信國吉助」裏銘「長享二年」、「明応五年」（「福永信国」p.5）。「豊前宇佐住信國吉助作」
- ⑨ 1492年：「延徳四年」（「石井銘鑑」p.1144）
- 以上、④～⑦までの「柳原系図」記載刀匠は〔吉包〕[1501-03頃没]、〔吉勝〕[1504-20頃没]が該当する。
- ⑩ 1540年：刀 61.9cm 銘「信國吉包作」裏銘「天文九年十月日」〔福岡市博物館〕蔵『赤羽刀』p.95<sup>35</sup>書誌
- ⑪ 1573-92年頃：【刀】銘：「天下第(略字)一 信國[左字]」裏銘：「大食上戸餅喰」注：「豊前天正頃」「本間銘字」p.88 〔信國恒吉〕（平左衛門）の時代。

### 3.2 新刀期〔筑前信国〕

〔筑前信国〕については「久野1」～「久野続2」が銘を同定した解説を行い、『福岡県史：金工編』は「久野」を主軸に他史料で補強している。又、〔瀧田伸吾〕（1984）（略称「瀧田」）<sup>36</sup>書誌に鮮明画像と解説あり。「久野」、「信國勘助系図」（〔信國吉清〕までとその後に分ける）、「常石新々刀編」の順に、紙面の都合上、数点を記載する。

◎十二代〔**信国吉貞**〕(-1640)は複数名の在銘あり。寛永十七年九月一日没の〔**昌翁宗繁居士**〕〔**信国勘助系**〕  
 (筑前初代信国〔**平助記**〕、初名〔**吉定**〕、〔**助左衛門**〕〔**藤五郎記**〕、〔**平四郎**〕〔**石井銘鑑**〕、〔**常六**〕)をここでは記す。

①1632年：銘「九州筑前住**信國源吉貞**」裏銘「干時寛永九年八月吉日」(左字銘押形有)〔**藤代**〕書影◎コマ51

②1632年頃：宝剣二尺五寸一分：梵字彫有〔志賀島神社〕蔵〔**久野1**〕p.33) (書影無)

③1639年：直刃：銘「筑前國**信國吉貞**」裏銘「寛永十六年二月吉日」：〔**黒田忠之**〕寄進〔**筥崎宮**〕  
 37)蔵〔**久野1**〕p.33)

《**吉定**》銘は、〔宇佐信国〕の〔**信國吉定**〕寛正[1461-65]、〔**信國吉助**〕子永正[1504-20]、〔**石井銘鑑**〕p.1139  
 もある。

④薙刀：湾刃：銘：「**信國源吉定作**」(左字押形有)〔**久野1**〕p.33)。

### 3.2.1 新刀期〔筑前信国〕〔吉次〕系

◎十三代〔**信国吉次**〕(-1663)〔**勘助**〕(〔**吉貞**〕次男)寛文三年七月没〔**實州良參居士**〕(〔**安国禪寺**〕過去帳)38)

①1625年：銘「**信國吉次**」裏銘「寛永二年」(正字)押形有(〔**瀧田**〕34書誌p.65)。(『福岡藩：文化』金工)  
 39)書誌p.439

②1634年：薙刀の押刀：銘「筑前住**信國吉次**」裏銘「寛永拾一年八月吉日」(左字銘押形有)〔**藤代**〕  
 書影コマ48

③剣：銘「筑前國住**信國源吉次**」〔**楡田神社**〕蔵(父〔**吉貞**〕の剣：銘「**信國**」と対)40)リスト

◎十四代〔**信国吉包**〕(-1693)〔**助左衛門**〕元禄六年八月没〔**夢住如幻居士**〕。祖父〔**吉貞**〕を祭る、〔**又平**〔**四男**〕父〕(〔**安国禪寺**〕過去帳)墓石有

①銘「筑前住**源信國吉包**」(左字銘押形有)〔**藤代**〕書影コマ46

②1673年：銘「筑前住**源信國吉包**」裏銘「寛文十三年八月吉日」(左字)押形有(〔**瀧田**〕34書誌p.63)

③1686年：銘「筑州住**源信國助左衛門吉包**」裏銘「貞享三年八月吉日」(左字)押形有(〔**瀧田**〕34書誌p.63)

◎十五代〔**信国重包**〕(1662-1728)〔**吉之**〕、〔**助左衛門**〕後〔**助六**〕、〔**正包**〕〔**原田助左衛門尉**〕享保十三年十二月病死〔**撥塵如釵居士**〕(〔**安国禪寺**〕過去帳)享保六年〔**徳川吉宗**〕の【享保諸国鍛冶御改】により名人「葵一葉」を切ることを許可される。刀《若狭正宗》模作、脇差《不動國行》焼直しを命ぜられ作刀。(『吉田家伝録』41書誌)〔**正包**〕銘は享保八年帰福後以降。

①銘「筑州住**源信國重包**」(左字銘押形有)〔**藤代**〕書影◎コマ218

②1713年：刀：銘「筑前箱崎八幡宮境内住**源左衛尉**」裏銘「**至徳**(ママ)三年三月吉日四十三才鍛」42)

③1717年：銘「筑州箱崎八幡宮於神前**源信國作**」裏銘「享保二年八月十五日以南蛮鐵**助左衛門尉重包**四十五歳鍛之」(左字)押形有(〔**瀧田**〕)34書誌p.65。

④1727年：刀：「葵一葉」彫、銘「**恭奉** 台命□□東武正宗写茲鍛之 □享保丁未春正月」裏銘「筑州**信國源正包**」(左字)押形有(〔**瀧田**〕)34書誌p.65。

◎十六代〔**信国吉包**〕(-1733)〔**勘助**〕享保十四年[1729]亡父助六跡式で五人拾五石被下(史料12)、享保十八年五月病死〔**教外智道信士**〕43書誌 父〔**重包**〕没後4年で病死。○在銘は未見。

◎十七代〔**信国茂包**〕(-1764)〔磯平〕〔磯之助〕〔**助左衛門茂包**〕、「宝暦十四年三月亡〔**勘十郎茂包**〕〔**直心是性信士**〕」〔安国禅寺〕過去帳、「藤五郎記」

幼時享保十八年、父〔勘助〕病死により町支配に四人扶持、〔**信国平四郎**〕家の〔**平四郎重久**〕が後見『吉田家伝録』。宝暦十四年、自殺により御家断絶「続風土記附録」

○1762年：銘「京信国十七世之孫 筑之前**源茂包**造之」裏銘「宝暦十二季春吉日」(左字)押印有(「瀧田」)<sup>34</sup>書誌 p66

### 3.2.2 新刀記〔筑前信国〕〔吉政〕系

〔勘助吉次〕の系統は〔吉清〕の後も明治までの系図は残されているが、〔平四郎吉政〕の系図は安政六年没の〔信国正助〕(1795-1860)の伝によると弟子が長崎に持ち去った故系図は残されていない<sup>44</sup>。従って、「藤五郎記」に記された系図以降は、〔井上秀吉〕氏等による在銘と過去帳の調査や〔久野繁樹〕氏の推敲による確定<sup>(久野)</sup>であり、諸説がある。ここでは、より史実に近い推敲を行い、誤伝があれば正す。

◎筑前信国二代〔**信国平四郎吉政**〕(-1653)〔**助左衛門**〕〔**平助**〕〔**吉貞**〕後〔**平四郎**〕「続風土記附録」後〔**善雅**〕、「承応二年十二月没〔**慶雪常快信士**〕」〔安国禅寺〕過去帳。〔長政〕より「政」を賜う「続風土記附録」。十二代〔信国吉貞〕長男、〔長政〕命にて備前〔一文字助宗<sup>45</sup>〕に学ぶ。嫡家は次男〔吉次〕が継ぎ、〔吉政〕は別家「続風土記」。【薙刀】の名手。

①銘「**源信国吉政**作」〔幡鉢の彫〕左字書影無<sup>(久野 2)</sup> p.37 (既出「吉次」が寛永十一年に左字を打つので、それ以前作)

②銘「筑前住**源信国平四郎吉政**」正字書影有<sup>(藤代辞典)</sup> p85

③1639年：二尺四寸六分：銘「筑前國住**源信国平四郎吉政**作」裏銘「寛永十六年二月吉日」正字書影無<sup>(久野 2)</sup> p.37

◎筑前信国三代〔**信国平四郎(二代)**〕(-1688)「貞享五年八月〔**一應悟心信士**〕平吉父」〔安国禅寺〕過去帳 (長男に〔信国平兵衛〕〔南部山城守〕へ参り御切扶にて勤む、次男〔信国次郎兵衛〕、〔南部山城守〕様へ参り、知行二百石にて奉公仕へ移住、三男(**平助**)が嗣子<sup>(藤五郎記)</sup>。久野氏は70余振り経眼。

①1666年：〔紅葉八幡宮〕に新作太刀寄進、1675年5月28日再寄進(「光之記」<sup>46</sup>書誌)。

②1673年：刀；銘「筑前住**源信国平四郎吉政**作」裏銘「寛文十三年二月吉日」正字書影有<sup>(書誌「瀧田」)</sup> p.59

③1685年：刀；銘「筑州住**源信国吉政**」裏銘「貞享貳年八月日」正字書影無<sup>(久野 2)</sup> p.39

◎筑前信国四代〔**信国平四郎(三代)**〕(1662-1717)〔**平助吉政**〕銘、〔**平吉**〕か<sup>47</sup>、のち〔**信国平四郎重宗**〕、「幼少で家を継ぎ月俸二口」<sup>(続風土記附録)</sup>「享保二年七月没法名〔**發心無相信士**〕」〔安国禅寺〕過去帳

①1685年：二尺四寸六分五厘：銘「筑前國住**源信国平四郎吉政**二十四才作之」裏銘「貞享貳年乙丑年八月吉日」正字書影有<sup>(久野 2)</sup> p.36 (「瀧田」p.60に銘「筑前住**源信国重宗**」のより鮮明な書影あり)

②1714年：銘「奉天照大神宮 寄進信国生国山都宇田郡高松庄者也 郡出五条三代之後西国下畢所為子孫 鍛之永奉奇進之 **平四郎**」裏銘「正徳四丁亥季二月吉祥日」正字書影無<sup>(久野 2)</sup> p.39 (先

祖の伝えを記した銘)

◎筑前信国五代〔**信国重久**〕(1694-1723)〔重宗〕後〔**平四郎吉政**〕<sup>〔吉田家伝録〕</sup>享保八年正月没法名〔**覚心相無居士**〕<sup>〔久野統2〕</sup>p.18 筑前刀鍛冶名工六人の一人<sup>〔吉田家伝録巻26〕</sup>。早世29才。

○銘「筑前住**源信国重宗**」正字書影有<sup>〔瀧田〕</sup>p.60

◎筑前信国六代〔**信国平四郎重久**〕(-1743)〔**弥九郎**〕<sup>〔寛保三年七月没法名〔秋山一溪居士〕〕</sup><sup>〔久野統2〕</sup>p.18 五代〔重久〕の弟。1733年、幼少の〔信国吉次〕系〔**磯平**〕を後見する<sup>〔吉田家伝録〕</sup> ○在銘未見

◎筑前信国七代〔**信国光昌**〕(1726-1804)〔光正〕〔左衛門〕〔延四郎〕<sup>〔文化元年七月〔又左衛門〕〕</sup> 法名〔**百鍊斎哲翁居士**〕〔**正光**〕<sup>〔安国禪寺〕</sup>過去帳48)筑前初代〔信国吉貞〕の四男〔**吉正**〕(〔**権三郎**〕後〔**安吉**〕秋月へ移住)の四代〔**安貞**〕(初〔**権三郎**〕後〔**常四郎安俊**〕49)の次男。〔信国重久〕男子なく、養子となる<sup>〔続風土記附録〕</sup>「八尾」。兄の〔**俊壽**〕(初名左太郎)桜町帝の御宇〔元文(1734)-延享4(1746年)〕上京し宝剣を鍛奉る。よって従五位下任大和守<sup>〔続風土記附録〕</sup>。〔光昌〕も同様か、在銘あり。弟子に〔**信国美直**〕や、〔**下村信八**〕の男〔**又助**〕もいる。50)

①1755年：銘「**信国大和守源光昌**」宝暦五 二月於筑州一ノ銅切落 裏銘「花落山人筑紫房江棧主橘氏」<sup>〔久野1〕</sup>p.41

②1767年：銘「**信国光昌造**」裏銘「明和四年八月日」正字書影有<sup>〔瀧田〕</sup>p.68(『黒田新統家譜巻之三十二』51)

③1783年：銘「**信国光昌造**」裏銘「天明三年二月日」左字書影有<sup>〔瀧田〕</sup>p.69(〔吉次〕系〔**茂包**〕が1764年に没し、お家断絶し〔**包利**〕〔1792没〕が家業を継ぐ間、嫡家が必要で、〔光昌〕は養父〔重久〕から「左字」を継承した可能性が高い。「続風土記附録」には「本編に見へたる三家に別れたる**嫡家**也(中略)この家吉定より代々俸禄厚く賜はりたりしか、重宗幼少にして家を續たりし故、月俸を減して二口を賜ひしか今もしかり(中略)茂包か弟子某(仁太郎と云)家業を継しか僱工也。」と事情を記したか。

### 3.2.3 新刀記〔筑前信国〕〔吉助〕系

初代〔**信国吉貞**〕の三男〔**信国吉助**〕の系統は諸説ある。「**吉助**、**吉貞**、今**重貞**に至れり」<sup>〔続風土記〕</sup>、「孫四郎**吉助**一作左衛門**吉興**—源市**吉親**」<sup>〔藤五郎記〕</sup>、「**吉助**—**吉貞**(家系に吉貞後に**重貞**と改む)—**吉親**(源市)で絶えた」<sup>〔続風土記附録〕</sup>「**吉助**(六太夫、孫四郎、祖九代伝源信国なるべし(中略)延宝三年九月**菊窓道光居士**か)—**吉貞**(作左衛門、寛文、延宝)—**重貞**(作右衛門又は作左衛門、宝永五年八月法名**心刀破愁信士**か) | **吉寛**(吉助子平兵衛祖拾代伝筑前信国同人(中略)元禄十二年死) | **吉重**(次郎兵衛、吉助二男南部家に抱えられ元禄十一年十一月死)<sup>〔久野3〕</sup>などである。「続風土記附録」が妥当と思われるが、再調査が必要である。

◎〔**信国吉助**〕(-1663?1675?)「〔孫四郎〕吉定三男」<sup>〔続風土記附録〕</sup>「寛文三年七月〔**月空周孤信士**〕助左衛門〔平四郎か〕弟」<sup>〔安国禪寺〕</sup>過去帳か、「延宝三年〔1675〕九月**作右衛門**〔**菊窓道光居士**〕」<sup>〔安国禪寺〕</sup>過去帳「〔久野説〕か」。

○在銘は未見

◎〔**信国吉貞**〕(-1708)〔作左衛門**吉興**〕のち〔**重貞**〕か、「宝永五年八月没〔**心刀破愁信士**〕〔作左衛門〕 叟」<sup>〔安国禪寺〕</sup>過去帳 吉貞と子の重貞は「続風土記附録」に「吉貞のち重貞と改む」とあるように親子でなく、同人と思われる。52)

- ①銘「九州筑前住**源信国**作**左衛門吉貞**」裏銘「寛文十二年[1672]壬子八月日」正字書影有書誌「久野 3」 p.25  
 ②銘「筑前住源信国**吉貞**」と、③銘「筑前住源信国**重貞**」正字書影有書誌「瀧田」 p.67の二振りは同一人の銘ぶり

◎〔**信国吉重**〕

〔吉重〕は『鍛冶備考』底本の「〔吉助〕の次男で南部公に仕えた〔新藤治郎兵衛国義〕[1699]没」の前銘説が定着している。確定的文書等は見当たらず。ここでは、藩の記録に提出した「藤五郎記」に従い二代〔信国平四郎〕の次男〔次郎兵衛〕こと〔新藤国義〕の前銘が〔**吉重**〕の可能性を記す。再調査が必要。53)

- ◎〔**信国包次**〕〔源兵衛〕〔重貞〕の子、史料 3、享保四年[1719]に「**信国重包**弟子,,,**信国源兵衛包次**」とある。吉助系は包次で断絶。「続風土記附録」では〔**信国源市吉親**〕が該当する。

○劍「筑前住**源信国包次**作」〔宗像神社〕旧蔵。書誌「久野 3」 p.27.

3.2.4 新々刀期以降〔筑前信国〕〔吉次〕系

〔吉次〕系は〔茂包〕で断絶した家を十六代〔吉包〕の四男〔又平〕の孫〔包利〕——包利の甥の〔吉清〕と続くが、「〔包利〕は〔吉次〕の系統の復活を試みるが失敗に終わる」『福岡県史：金工編』。しかし、〔吉清〕の跡を下村信八の男〔又左正義〕が養子となり、のちに藩工として再興した。

- ◎十八代〔**信国包利**〕(-1792)〔仁太郎〕〔勘助系図〕「寛政四年三月〔仁太郎〕**吏〔休岩活歩信士〕**」〔安国禪寺〕過去帳〔又平〕(十六代〔吉包〕の四男)―〔又作〕―〔包利〕54)しかし、「家業を継ぐ、僇工也。早世し嗣なし」〔続風土記附録〕とある。○在銘は未見。

◎十九代〔**信国吉清**〕〔藤五郎〕〔勘助系図〕法名等過去帳に見当たらず。〔又平〕―〔忠衛門〕―〔孫市〕―〔**吉清**〕55)「藤五郎記」にあるように、寛政十一年[1799]藩へ由緒を提出した。○在銘は未見。

◎廿代〔**信国行国**〕(1788-1865)初め〔正義〕。〔**重包**〕〔又助〕〔**定国**〕〔久国〕〔又左〕と打つ。「慶應元年六月〔又左〕**吏〔本来鍛劔居士〕**」〔安国禪寺〕過去帳〔下村信八〕の男で〔**信国吉清**〕の養子。〔信国又左衛門〕(光昌か)の弟子。のち〔水心子正秀〕に学び帰福、天保七年(1836)黒田藩工となる。安政三年(1856)独礼、御城代組。万延元年(1860)一人扶持加増〔久野 2〕 p.28-29)

①1808年：銘「**信国源重包**」裏銘「文化五年三月吉日於師正秀宅造之」(以下4件〔久野 2〕 p.29))

②1819年：銘「文政二卯春同年十一月**信国又助源正義**彫刻之」

③1842年：銘「天保十三年八月沖津宮奉納**信国又助源久国**」

④1855年：銘「筑前国福岡住**信国源久国**彫物久左衛門定国作」裏銘「安政二年二月日六十七才」(画像有書誌久野 2p.29))

- ◎〔**信国定国**〕(1829-1858)「**又助父**安政五年八月〔**大然道光居士**〕」〔安国禪寺〕過去帳とあるが、「久野 2」では「勘助系図」と同様「久国の嫡子」であり、「七左衛門定国は(中略)法名新帰元大然道光居士とあり、おそらく七左同人であろう」としている。一方、資料 18,22 にある〔定国〕は「〔平助〕[1831]―〔又左衛門〕[1853]―〔**定国**〕[1859]―〔正助〕[1860]」で〔吉政〕系である。〔定国〕は早逝故、年代

的には〔又左衛門〕の子の世代である。宝暦~慶応の過去帳で、祭主と思われる俗称は年代順に「又左衛門」(光昌関連記事:1758年(父), 1787(母), 1804)、「仁太郎」(包利関連記事:1774, 1794)、「平助」(美直 1833(妻))、「延四郎」(1842(娘))、「又左衛門」(1831(父), 1853)「又助」(久国 1838(妻))=「又左」(行国 1865)がいる(下線は勘助系)。再調査して推敲する必要がある<sup>56)</sup>。○作刀は未見。

◎廿一代〔**信国廉之助**〕(-1886?)「慶應元年十二月〔行国〕の跡を継ぐ十一才より相務む」<sup>史料7</sup>「明治十九年十一月羊三郎 麦〔肝然常心信士〕」<sup>安国禪寺過去帳</sup>か。○作刀は未見。

◎廿二代〔**信国重戴**〕(1835-98)「〔**松田正吉**〕之を継、〔信国重戴〕行年六十四才明治三十一年三月〔**得峯寿山禪士**〕」<sup>史料7</sup>

○刀：銘「筑前住源信國重戴」〔福岡市博物館〕蔵『赤羽刀』p.48<sup>註33書誌</sup>

◎廿三代〔信国久米吉〕松田正吉の次男 ◎廿四代〔**信国正戴**〕松田正吉の三男〔重戴〕を継ぐ。勘助系最後の刀匠。

### 3.2.5 新々刀期以降〔筑前信国〕〔吉政〕系

◎筑前信国八代〔**信国美直**〕(-1831)〔**義直**〕〔**平助**〕〔**又左衛門**〕はじめ〔長兵衛〕「天保二年五月法名〔**鐵翁道明居士**〕又左衛門父」<sup>〔安国禪寺〕過去帳</sup>〔義猶〕か。「七代〔光昌〕男子なく平助美直(初長兵衛と称す)を養て嗣とす」<sup>〔続風土記附録〕</sup>。寛政五年[1793]十一月〔黒田齊隆〕が命じて〔美直〕、後見〔光昌〕を藩廷に座らせを造らせ、藩の土産として作刀を推奨(『黒田新統家譜卷之四十一』)<sup>57書誌</sup>。「文化五年(1808)〔**信国伊右衛門**〕は福岡〔信国平助義直〕に入門し秘伝〔**信国吉定**〕と称す」<sup>〔柳原系図〕</sup>の〔**平助義直**〕は、年代的に〔**美直**〕を指す。〔義猶〕についても再度遺作を調査して鑑定する必要がある。

①1796年陣太刀：銘「源信國美直造之」裏銘「寛政八年八月日筑州吉川新三祐守」(宗像神社旧蔵)画像無書誌「久野1」p.43

②1802年刀：銘「筑州官工信國源美直」彫物劍卷竜、裏銘「享和二癸亥二月日」彫物旗鉾梵字 押形有<sup>書誌</sup>「久野1」p.43

③1820年〔黒田齊清〕「太刀一腰(信國美直か作黒作左右卷)を澳津宮に(後略)」<sup>史料13</sup>

◎〔**信国義昌**〕(1783?-1853?)〔**美昌**〕か〔**冷泉津義昌**〕か。「〔又左衛門〕 麦嘉永六年十一月〔**霜林浄果禪士**〕」<sup>安国禪寺過去帳</sup>か?〔平助美直〕の跡は〔又左衛門**義昌**〕である。〔宗像大社〕澳津宮に奉納刀がある<sup>史料13</sup>。

①1836年太刀：銘「天保七年三月吉日」裏銘「信國又左衛門源義昌謹造」押形有<sup>書誌</sup>「久野1」p.44

②鐔：銘「冷泉津信國 源義昌造」正字 筆者蔵写真 3 ①と②は國字が大きく異なり、②が別人か老塾の可能性もある。

③脇指 一尺五寸：銘「筑州源信國義昌 行年七十歳」史料13p.238

◎〔**信国正助**〕(1795-1860)〔**又左衛門**〕<sup>伝承</sup>「安政六年七月〔**正安宗白善士**〕瓦町信國氏」<sup>安国禪寺過去帳</sup>「六十六才」<sup>一行寺過去帳</sup>「平助〔**美直**〕天保三年[1832]没 — 〔又左衛門〕〔**義昌**〕嘉永六年[1853]没 — 〔**定国**〕七左衛門安政五年[1859]没 — 〔**正助**〕安政六年[1860]没」が定説であるが、同時代に義昌 70才、正助 66才卒で、かつ、〔**美直**〕の子の世代である。「八尾記」の「〔**義直**〕平太郎」の位置にいる。また、

次に記す〔義一〕は正助没後の刀があり別人である。〔正助〕を含め新々刀期信国の再調査が必要である。○在銘は未見

- ◎〔信国義一〕(-1861?)〔義秀〕同人か?〔又左衛門〕「文久元年十二月廿三日〔傳心宗通居士〕瓦町信国氏」安国禅寺過去帳か?「久野1」では作例②の次に「(中略)義一は義直の先人で(中略)深い関係がある」と記すように、次に記す〔信国義直〕(-1875)の親か伯父叔父の世代である。〔義一〕、〔義秀〕を記載しているのは「常石新々刀編」、「久野」、「八尾記」であるが、いずれも法名は記載されていない。安国禅寺過去帳の同時代で「瓦町信国氏 又左衛門方」は〔正安宗白善士〕の〔正助〕と〔傳心宗通居士〕のみであり、ここに〔傳心宗通居士〕は〔信国義一〕を推定する。

①1861年：銘「筑前國源信國又左衛門尉義一作」裏銘「文久元年二月日」〔宗像神社〕藏「久野1」p.47

②短刀：銘「筑前住信國義一 同義直作」裏銘「藩邸土松岡重次陪駕至福城口造之者也」押形有「久野1」p.47

- ◎〔信国義直〕(-1875)〔又左衛門〕「明治八年三月〔信國〔信太郎〕父〔義直〕 叟〔鐵仙道肝居士〕」安国禅寺過去帳「安政二年(1856)〔信国弥兵衛吉誠〕は〔平四郎義直〕に入門し」〔柳原系図〕とある義直か。〔信国平四郎〕家最後の刀匠。

①刀二尺四寸八分：銘「筑前國源信國平太郎義直」〔若松市恵比寿神社藏〕か、以下「久野1」p.46-47

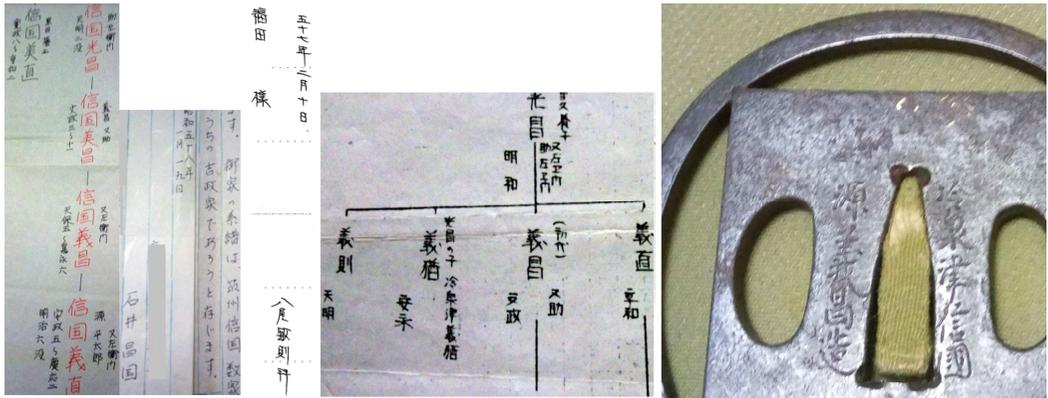
②1865年刀二尺六寸三分：銘「筑前官工源信國又左衛門義直作」裏銘「慶應元年巳八月日」

③銘「筑前國源信國義直」〔北九州市時と風の博物館〕押形<sup>58</sup>書影◎◎

#### 4 終わりに

紙面の都合で〔筑紫信国〕の他の刀匠、{越後}、{南部}、{備前}等の信国については割愛した。現資料での推敲を終えるが、在銘刀や無銘刀を含め、今後さらに精査が必要であると痛感した。故〔福田裕〕から調査を依頼されてから48年、神奈川の故〔石井昌国〕先生、九州の〔信国国利〕先生、故〔八尾敏則〕氏、菩提寺の〔一行寺〕・〔安国禅寺〕や、〔宇佐八幡〕、〔宗像大社〕、〔大宰府天満宮〕、〔筥崎宮〕、〔櫛田神社〕、〔福岡市博物館〕、〔福岡県立図書館〕、各大学図書館、〔刀剣柴田〕等々で史料・資料を集めていた。〔筑紫信国〕については〔久野繁樹〕氏が詳細な研究をされたおかげと感謝しているが、推定された誤読部分が総合的に研究することで明らかになった。本研究が進展したのは、「国会デジコレ」や【Google Books】<sup>59</sup>等デジタルアーカイブのおかげが大きい。貴重書や入手できない研究書が自宅でデジタル典拠として活用できたからである。「国会デジコレ」の「図書館送信参加館」分や他の資料はコピーをPDF化した。また、刀匠はデータベース化し、検索可能とした。新しい発見とデジタル化で作業が捗り、通勤電車中でも執筆が可能となった。本稿も【学術機関リポジトリ】<sup>60</sup>等で公開されるが、「ウィキペディア」等のオープンデータのデジタル典拠となろう。著作権表示を条件のCC-BY<sup>61</sup>である。本稿以降の修正や新発見は【ResearchGate】<sup>62</sup>で更新する。また、新発見や筆者の誤読等があった場合、ご連絡されたい。今後、デジタル典拠の増加による刀剣研究の進展を期待する。最後に、南北朝時代からの信国作品や、関連史料を残された全ての方々や機関、また、調査にご協力下さったの方々や機関に感謝し、本稿を終える。

写真 1 石井昌国記述「筑州信国吉政家系図」 写真 2 〔八尾敏則〕氏資料 写真 3 《鐙》「冷泉津信國 源義昌造」



注

- 1 Comprehensive research on genealogy of the Nobukuni group swordsmith | 「刀匠信国系図の総合的研究：山城信国を中心に」 / 〔福田,博同〕『跡見学園女子大学文学部紀要』No.53, p.79-107  
[https://www.researchgate.net/publication/316427564\\_Comprehensive\\_Research\\_on\\_Genealogy\\_of\\_the\\_Nobukuni\\_Group\\_Swordsmith\\_daojiangxinguoxitunozonghedeyanjiushanchengxinguowozhongxintoshite?ev=prf\\_high](https://www.researchgate.net/publication/316427564_Comprehensive_Research_on_Genealogy_of_the_Nobukuni_Group_Swordsmith_daojiangxinguoxitunozonghedeyanjiushanchengxinguowozhongxintoshite?ev=prf_high).
- 2 Kokuritsu Kokkai Toshokan Digital Collection | 【国立国会図書館デジタルコレクション】(以下「国会デジコレ」と略す): <http://dl.ndl.go.jp/>〔国立国会図書館〕では2002年からインターネット公開していたデジタルアーカイブ【近代デジタルライブラリー】(略称「近デジ」)があった。サイトリニューアルやサービス拡大で2011年に【国立国会図書館デジタル化資料】を公開、2014年に「国立国会図書館デジタルコレクション」と改称し、2016年に「近デジ」を廃止し、「国会デジコレ」に統合。著作権の切れた資料をインターネット公開するが、著作権の関係で特定図書館へもサービスする「図書館送信資料」、国会内限定の「国立国会図書館内限定」サービスがある。
- 3 Kuni Shitei Bunkazaito DB | 【国指定文化財データベース】/文化庁編 [http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index\\_pc.html](http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.html)  
 1997年から文化庁が公開している。「文化財保護法」に基づき、国が指定・登録・選定した文化財等の情報を、「名称」、「分類」、「都道府県」、「指定等区分」、「所有者」、「時代」、「地図」等で検索できるサービス。
- 4 〔Internet Archive〕のデジタル Web アーカイブ。【WayBack Machine】: <https://archive.org/>
- 5 Harvard Houshiki | 【ハーバード方式】: 論文中に著者の姓(出版年)と書き、参考文献を巻末に記入する方式(「参考文献の書き方・科学技術情報プラットフォーム・科学技術振興機構」)  
[https://jipsti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST\\_booklet2011.pdf](https://jipsti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST_booklet2011.pdf)。ここでは姓名(出版年)を記入し脚注番号で巻末参照にリンクを飛ばす。
- 6 Nobukuni Hatsu no Keizu Daidai Soshi Tsuki no Koto | 「信国初系図代々祖子付之事」(略称「信国吉貞家伝」)『福岡藩仰古秘笈 卷二五』所収(福岡県立図書館蔵)
- 7 Yanagihara Nobukuni Keizu | 「柳原信国系図」信国剣次郎写、信国国利氏蔵、本稿が初出。「信国柳原祖先之碑」については福永酔剣著「了戒・信国考」(銀座刀剣柴田月刊誌『麗』207, 1991, p.6)に一部記載がある。前号史料の訂正: p.6 及び注 18 誤「剣次郎」正「郷太郎」,
- 8 Nobukuni Sukeroku Jutsu Nobukuni Keizu | 「信国助六述信国系図」(吉田治年勤事之章.16 『吉田家伝録』所収)大宰府天満宮, 1981.9 所蔵館: 筑波大学附属図書館等 [https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/CiNii:http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01902041](https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/CiNii/http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01902041)
- 9 Kyouho Shokoku Kaji On'aratame | 『享保諸国鍛冶御改』(国立公文書館デジタルアーカイブ所収)  
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F1000000000000033697> 「信国の末〔信国助六〕〔源信国重包〕御刀三腰御脇指二腰打上御脇指一腰《不動國行》の御彫物写」の記事、〔信国平四郎〕、「信国助六重包弟子の〔信国源兵衛包次〕」の記事有。
- 10 Chikuzen no Kuni Zoku Fudoki | 『筑前國統風土記 卷 29: 土産考上』 / 〔貝原, 益軒〕編。〔福岡県立図書館〕「貴重資料の紹介」コマ 5-8. <http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/gallery/H25/PDF/fudoki29.pdf>
- 11 Nobukuni Kansuke Keizu | 「信国勘助系図」(『刀剣美術』270号 p.28-29 所収 所蔵:  
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512>
- 12 Moritsugu Norisada Zo: Nobukuni Keizu | 「守次則定蔵信国系図」(福永酔剣「筑紫了戒・信国考」続(刀

- 劍柴田月刊誌『麗』no.297, p.6, 1990 収) 所蔵: <http://id.ndl.go.jp/bib/000000025290>
- 13 Chikuzen no Kuni Zoku Fudoki Furoku | 『筑前国統風土記附録.卷四十七』土産考.上 / 〔鷹取, 周成〕(ちかしげ) 編 (国会デジコレ<sup>書影</sup>) <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2500149/11?viewMode>
- 14 Usa Itouzu Monjo | 『宇佐到津文書』大分県史料刊行会編 (大分:大分県立教育研究所,1964) 所蔵:  
<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN02916132>
- 15 Nagano Nikki (Kinsei Fukuoka Hakata Shiryo. 1) | 『長野日記』 / 〔長野,源太夫〕著 (『近世福岡博多藩史料 / 秀村選三編纂』第1集 所収) 西日本文化協会, 1981 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00338261>
- 16 Kuroda Shinzoku Kafu | 『黒田新統家譜』 / 〔川添,昭二, 福岡古文書を読む会〕校訂(『新訂黒田家譜』所収) 東京: 文献出版, 1982- 所蔵 <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01494422>
- 17 Koto Meizukushi Taizen | 『古刀銘尽大全』 / 〔仰木,伊織〕編 田中汲古齋, 1792 Google Books :  
<https://books.google.co.jp/books?id=3IhdAAAaAAJ> 〔本阿弥,長根〕は『校正古刀銘鑑』で誤り多しと否定された書だが、豊前信国の旧説として山城から豊前への系図が記載されている。
- 18 Unchimeishu | 『雲智明集』(『掌中古刀銘鑑』江戸:須原屋茂兵衛, 弘化3 [1846] 所収) 所蔵:  
<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimedio/search/search.do?mode=simp&keyword=%E6%8E%8C%E4%B8%AD%E5%8F%A4%E5%88%80%E9%8A%98%E9%91%91> 筑波大学中央図書館蔵 見返しの書名は雲智明集、序には『掌中古刀銘鑑』、別名『鑑定秘事録』、刊記に弘化三丙午とある。幕末の栗原信充が編集。『国書総目録補訂版』(岩波書店, 1989-1991)では、尾関元富『古刀銘鑑』とある」と同大学の書誌記述がある。
- 19 Ishii Masakuniki | 「石井昌国記: 信国平四郎家系図」筆者蔵。書影の一部は前号に掲載。
- 20 Shinto Koto Taikan | 『新刀古刀大鑑』下 / 〔川口, 陟〕著 (東京:日本刀剣学会,1930)書影□コマ 445-454 :  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1234064>
- 21 Zoku Chikuzen Shinto no Kenkyu.2 | 「統筑前新刀の研究(二)」 / 〔久野, 繁樹〕(『刀剣美術』65. 所収) p.12 によれば、文化十五年[1818]戊寅二月廿六日当時、櫛田神社隣の〔大乘寺〕へ祈願成就の奉納門徒有志筆頭に〔信国又左衛門美昌〕があり、戦災で焼けた〔大乘寺〕が下の端移転に伴い〔美昌〕所縁の材木町〔安国禪寺〕へ移転した。
- 22 Chikuzen Shinto no Kenkyu.1 | 「筑前新刀の研究(一)」 / 〔久野, 繁樹〕(『刀剣美術』52号 p.31-48 所収) 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512>
- 23 Chikuzen Shinto no Kenkyu.2 | 「筑前新刀の研究(二)」 / 〔久野, 繁樹〕(『刀剣美術』53号 p.16-33 所収) 所蔵: 同上
- 24 Chikuzen Shinto no Kenkyu.久野繁樹「筑前新刀の研究」(三) (『刀剣美術』54号 p.24-29 所収) 所蔵: 同上
- 25 Zoku Chikuzen Shinto no Kenkyu.久野繁樹「統筑前新刀の研究」(一) (『刀剣美術』64号 p.2-7 所収) 所蔵: 同上
- 26 Nihonto no Kenkyu to Kantei. Kotohen | 『日本刀の研究と鑑定』古刀編 / 〔常石,英明〕編 所蔵: 同上
- 27 Nihonto no Kenkyu to Kantei. Shintoen | 『日本刀の研究と鑑定』新刀編 / 〔常石,英明〕編 所蔵: 同上
- 28 Nobukuni Keizu | 〔八尾, 敏則〕記「信国系図」(略称「八尾」)筆者蔵(写真3)。八尾氏は櫛田神社神室の信国吉貞および吉次揃いの御剣を県文化財指定申請について調査報告書を作成している。
- 29 Nihon Toko Jiten | 『日本刀工辞典』新刀編 / 〔藤代,義雄〕著. 藤代義雄, 1937  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1116191>
- 30 Token Meiji Taikan | 『刀剣銘字大鑑: 原拓土屋押形』 / 〔本間, 薫山〕、〔石井, 昌国〕編, 雄山閣出版, 1997.10

- <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA40269719>
- 3<sup>1</sup> Nihonto Meikan | 『日本刀銘鑑』 / [石井,昌国] 編著, 雄山閣出版, 1976 所蔵:  
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN11708577>
- 3<sup>2</sup> Kurashiki Token Bijutsukan | 倉敷刀剣美術館 : 脇指《信国》(宇佐)  
<https://www.touken-sato.com/event/katana/2015/04/W-nobukuni-04.html>
- 3<sup>3</sup> Usashi Shitei Bunkazai Ichiran | 宇佐市指定文化財一覧: 県指定文化財  
<http://www.city.usa.oita.jp/soshiki/43/2791.html>  
県指定重要文化財に《宇佐神宮太刀 銘:信国》あり(画像なし)。「吉貞記」にいう太刀か否かは未確認
- 3<sup>4</sup> Boshi Nyuminki | 『戊子入明記』(『**続史籍集覧**. 第1冊』所収:国会デジコレ 1259144)コマ 240 URL:  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1259144/240> 「龍太刀 二腰實三貫文充信國作之」応仁の入明記に明皇帝への献上品の一つの信國太刀である。銘「信國作」裏銘「成化二年」と本作の関連は要調査。
- 3<sup>5</sup> Akabaneto | 『赤羽刀 : 戦争で忘れさられた五千余の刀たち』 / [刀剣春秋社編集部] 編, 2012, p.67  
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB1376703X>
- 3<sup>6</sup> Shintoki ni okeru Chikuzen Nobukuniha Ippa no Kosatsu | **新刀期における筑前信国一派の考察** / [瀧田, 伸吾] 『福岡大学体育学研究』, 14(2), 1984, p.51-67。
- 3<sup>7</sup> Hakozakigu | 筥崎宮 <http://www.hakozakigu.or.jp/>
- 3<sup>8</sup> Ankoku Zenji Kakocho | 安国禪寺過去帳 : 福岡市中央区天神 3 丁目 14-4 「久野続 2」 p.12 によると [信国 光昌] (-1804)の菩提寺真言宗 [大乘寺] が明治の区画整理で移転し、光昌所縁の安国禪寺に移転した。筆者等は 48 年前に先祖供養の為再調査した。『福岡藩文化』/[西日本文化協会] 編纂, 下, (福岡県史 / 西日本文化協会編纂, [48] 通史編) に過去帳の記載があり「久野」を踏襲したと思われるが、若干の誤読がある故、本稿で正す。
- 3<sup>9</sup> Fukuokahan : Bunka | 『福岡藩 : 文化』県史.下 / [西日本文化協会] 編, 福岡県,1994  
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN0997262X>
- 4<sup>0</sup> Fukuokaken no Bunkazai | 福岡県の文化財 / 福岡県 <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/bunka/index.asp> カテゴリで検索→有形文化財・工芸・県指定文化財にある。
- 4<sup>1</sup> Yoshida Kadenroku : Fukuokahan | 『吉田家伝録 : 福岡藩. 中巻』檜垣元吉監修.-- 太宰府天満宮,1981.94 p790-792 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01902041>
- 4<sup>2</sup> Katana mei Chikuzen Hakozaki Hachimangu Keidaiju Minamoto no | 刀 : 銘「筑前箱崎八幡宮境内住源 □□□」裏銘「至徳三年三月吉日四十三才鍛」本作は [福岡県立社会教育総合センター] の「福岡市に所在する文化財」では、([http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/bunka/contents\\_map\\_search.asp?name=fukuoka](http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/bunka/contents_map_search.asp?name=fukuoka)) 「筑前箱崎八幡宮境内住源左衛尉八幡宮 至徳三年三月吉日四十三才鍛」と記載され、解説もある。しかし、「久野続 1」 p.3 では、筑前を「筑州」、左衛尉を「信國作」、至徳を「正徳」と読み、〔重包〕四十三才の作としている。また、至徳であれば、山城〔二代信国〕または〔源左衛門尉〕の時代で「吉貞記」にある「〔安心院〕に重恩」の可能性も考えられるが、その可能性は薄い。従って〔重包〕作の可能性が高いが、正徳三年は重包四十一才であり、再調査が必要である。
- 4<sup>3</sup> Token Bijutsu | 『刀剣美術』 270 号 p.28-29 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00372512> 享保八年没と誤記している「久野 2」をもとに、『福岡藩文化』/[西日本文化協会] 編纂, 下, (福岡県史 / 西日本文化協会編纂, [48] 通史編) p.441 は訂正が必要。 <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN09703220>

- 44 Nobukuni Masasuke | [信国正助]: 長女 [福田エン] (1834-1909)の伝による (除籍謄本があるが個人情報保護により記載しない)。エン婚姻後、福田家の菩提寺 [一行寺] にも墓を移し、福田の子孫が [安国禅寺] と [一行寺] で正助を祭っている。[安国禅寺] 過去帳には調査当時、瓦町信国又左衛門方と呉服町信国元清方の分けがあるが(井上翁の調査か、禅寺の元筆かは再調査が必要)、瓦町信国氏。系図は正助の弟子が持ち出し逐電したと伝えている。[正助] は [又左衛門] を称したが [吉貞] と異なり、書付は残していない。
- 45 Ichimonji Sukemune | [一文字助宗]: 備前 [福岡一文字派] で承元二年[1208]二月の [後鳥羽上皇] の【御番鍛冶】。従って [吉政] は [長政] 公の {長船町福岡} の一文字助宗伝を受け継ぐ刀匠に師事したと考えられる。
- 46 Mitsuyuki Ki (Shintei Kuroda Kafu) | 「光之記」(『新訂黒田家譜.巻之二』所収) / 川添昭二,福岡古文書を読む会校訂.東京: 文献出版, 1982.5, p.304 寛文六年九月 [紅葉八幡宮] 遷宮記事。p379 に延宝三年記事: 「紅葉八幡宮に新作の太刀寄進 寛文六年、紅葉八幡宮[現福岡市早良区高取]に新作の太刀三口寄進し給ひしかとも、其裝飾精好ならずとて、再び [信国吉政] [下坂辰仲]、[権三兵衛守次] に新に作せしめられ、ともに三口をのの裝飾精美を極めて成就しけれハ、今年五月二十八日 [毛利長右衛門] を使者として、紅葉八幡宮に奉納し給ひける。」
- 47 Nobukuni Heikichi | [信国平吉]。[安国禅寺] 過去帳(48年前調査)は、法名 [一應悟心信士] に「平吉父」とあるが、兄二人は盛岡へ移住したので、筑前信国四代が考えられる。
- 48 Nobukuni Masamitsu | [信国正光]: 「安国禅寺過去帳」の [光昌] の室は「文化四年[1807]八月十日 正室 妙光大姉 信国正光又左衛門室」とある。「久野 2」が「わざわざ正妻と断った [正妻]」の文字は、現在安国禅寺に石碑が見当たらず、確認できない。天保九年[1838]十二月に亡くなった [又助] の妻も [本室妙鏡善女] とあり、「正室」は [正光] の室の意である。
- 49 Nobukuni Yasutoshi | [信国安俊]: [安国禅寺] 過去帳では、子の [光昌] 以前に [又左衛門] を名乗った刀工はいないので、宝暦七年[1757]三月十八日没の [又左衛門] 父: [義岳 勇居士] と推定される。秋月から福岡へ戻った後の遺品は、刀: 銘「筑州福岡住信国源安俊作」(福岡市博物館所蔵『黒田家の甲冑と刀剣』2版, 2016, p.77)
- 50 Nobukuni Matasuke | [信国又助] [久国]: 「久野統 2」では「時代的に見ても美直を指したものと思われるし、親の光昌が信八と云ったかどうか分からないが、...」と [光昌] を [下村信八] と推定しているが、矛盾がある。[光昌] は [信国安俊] の次男で [信国弥九郎重久] の養子であり、[下村] ではない。「又助は又左衛門の弟子で下村信八の男」の記事は、[藤五郎吉清] を継いで正系を復活した [信国行国] (のち正義、重包、又助等) 慶應元年[1865]没も名乗っている。
- 51 Kuroda Shinzoku Kafu, Vol.32 | 『黒田新統家譜.巻之三十二』(『新訂黒田家譜』2巻所収)/ [福岡古文書をよむ会] 編, 文献出版, 1982-87, p.446-447 所蔵: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01494422> [黒田継高] 「本丸に祠を建て長政を祭る」記事: 「八月二日刀脇指ハ [信国光昌]、[又左衛門] に命して作らしめらる。刀ハ藩祖の常に佩給ひし二字國俊をうつさる。(後略)」にある刀か。
- 52 Nobukuni Yoshisada | [信国吉貞] (吉助系)。「続風土記」「勘助系図」では、「[吉助]、[吉貞]、今 [重貞] に至れり」としているが、「続風土記附録」に「家系に [吉貞] 後に [重貞] と改む」とあり、「瀧田」押形を見た結果、同人と思われる。
- 53 Nobukuni Jirobee | [信国次郎兵衛]: 久野氏は「次郎兵衛と名乗ったのは [吉重] で (中略) [新藤] 国義は [吉重] の後銘であろう。(中略) [平四郎吉政] の孫と称したのは吉助が早逝したか(中略)伯父にあたる吉

- 政の名を借用したものと思われるが(後略)」と根拠を示さず類推している。安国禅寺過去帳には〔吉重〕・〔次郎兵衛〕も見当たらず、〔次郎左衛門〕の子が元禄二年[1689]に亡くなっている。
- 54 Nobukuni Jintaro Kanetoshi | 〔**信国仁太郎包利**〕は「勘助系図」では〔信国吉包〕の四男〔文平〕の孫と記入されているが、「藤五郎記」や「安国禅寺」過去帳は〔又平〕(浄書後の過去帳は〔又八〕)と記されている。従って〔又平〕が正しい。
- 55 Nobukuni Togoro Yoshikiyo | 〔**信国藤五郎吉清**〕:〔安国禅寺過去帳〕で同年代未確定法名は〔**仙路自通信士**〕嘉永六年[1853]がいるが年代的に別人と思われる。また、「〔定国〕**又助父**安政五年八月〔大然道光居士〕」の可能性もある(注 57 参照)。
- 56 Nobukuni Sadakuni | 〔**信国定国**〕。「又助嫡子」の場合〔行国〕41才の時の子。過去帳の元筆でなく、井上調査と思われる書き込みの「又助」は「元清」方と記載されている。「又助父」であれば〔定国〕は〔下村信八〕か〔藤五郎吉清〕であろう。〔藤五郎〕が『町家由緒記』届け出 1798年当時 30才前後と推定すると、60才前後に定国を生んだことになり不自然ではない。勘助系図の成立年代が近いので「又助父」が誤記か。要再調査。
- 57 Kuroda Shinzoku Kafu, Vol.41 | 『黒田新続家譜.巻之四十一』(『新訂黒田家譜』4巻所収)/〔福岡古文書をよむ会〕編, 文献出版,1982-87.p.251
- 58 Kitakyushushi Toki to Kaze no Hakubutsukan | 〔北九州市時と風の博物館〕>「筑前黒田藩刀匠筑前信国派・初代吉政・義直」<http://www.kitakyushu-museum.jp/resources/493>
- 59 Google Books | グーグル・ブックス <https://books.google.co.jp/> 1996年 Google の共同設立者 Sergey Brin と Larry Page は世界中の書籍のデジタル化を計画した。2004年に【Google Print】プロジェクトとして開始し 2005年に改名。著作権問題の紆余曲折があった。全文検索と著作権切れ図書の PDF 書影閲覧、出版社のオンライン販促処置で「スニペット表示」も可能。
- 60 Gakujutsu Kikan Repository | 学術機関リポジトリ <https://www.nii.ac.jp/irp/> 大学と構成員創成のデジタルアーカイブ。検索サービスは【JAIRO Cloud】 <https://community.repo.nii.ac.jp/>
- 61 CC-BY | クリエイティブ・コモンズ・ライセンス: 表示, <https://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/deed.ja> 国際非営利組織クリエイティブ・コモンズの著作権ライセンスで、〔著作権者〕の表示を義務付ければ、再配布、可変可能
- 62 ResearchGate <https://www.researchgate.net/home> 2008年、〔Ijad Madisch〕が設立。研究者間のデジタルアーカイブと SNS [https://www.researchgate.net/profile/Ijad\\_Madisch](https://www.researchgate.net/profile/Ijad_Madisch). 公刊データのみならず更新や未発表資料のアップロードも可能。